

不定代名詞 *on* と人称代名詞 *nous* の人称論的観点からの一比較考察

— 口語における *nous* の代替の *on* に着目して —

Étude comparée des pronoms personnels *on* et *nous*

— autour de l'emploi de *on* dans la langue parlée

鈴木 拓真

Takuma SUZUKI

東京外国語大学博士前期課程

Master's Program, TUFS

ふらんぼー(Flambeau) vol.43 2017, p.72-86.

原稿受理 2017-12-04 ; 最終版 2017-02-04

抄録

文の主語が人間であることを表す不定代名詞 *on* は、とりわけ口語において 4 人称 *nous* の代替語としてしばしば用いられている。本論文では、まず人称代名詞の性質を明らかにしつつ、4 人称代名詞 *nous* と不定代名詞 *on* の意味的価値について分析し、その上で口語におけるこれら 2 つの代名詞の使用について ESLO2 コーパスを用いて考察する。そしてこの考察をもとに現代フランス語における不定代名詞 *on* の機能についての一仮説をたてる。

Résumé

Le pronom indéfini *on*, qui implique que le sujet de la phrase est humain, s'emploie souvent à la place de la 4^e personne *nous*, surtout dans la langue parlée. Dans cet article, en tantant d'explicitier la nature des pronoms personnels, nous analyserons d'abord la valeur sémantique de *nous* et *on*, puis nous examinerons l'usage de ces pronoms dans la langue parlée avec le corpus ESLO2. À la suite de cette analyse, nous formulerons une hypothèse concernant la fonction du pronom *on* en français contemporain.

キーワード

on、*nous*、人称代名詞、口語、発話行為

© ふらんぼー Flambeau 43 (2017) pp.72-86.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室

183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1

Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



0. はじめに

代名詞 *on* が、「誰か」、「人一般」のような不定の人を表すだけでなく、人称代名詞の代用として用いられることはよく知られている。また、現代口語においては、(1)のように、とくに 4 人称代名詞 *nous* の代替として主語に *on* が頻繁に用いられているが、Fløttum et al. (2007)をはじめとした先行研究において 4 人称 *nous* の代替の *on* は、*nous* と対等に用いることができると指摘されている。

(1) MQ293 : j'aime pas les gens.

DR381 : c'est vrai qu'on n'est pas des gens.

MQ293 : bah non vous êtes pas des gens.

RN166 : non nous on est exceptionnel.

MQ293 : c'est ça (ESLO2_REPAS_1260¹)

一方、4 人称以外の人称では、*on* をかわりに用いることで発話に文体的効果 (effet stylistique) をもたらすとされている。(2)の *on* は発話者とは対等の関係にある対話者を指している例で、対話者が 1 人ならば 2 人称代名詞 *tu*、複数人いる場合は 5 人称代名詞 *vous* が本来用いられるべきところだが、土井 (1992)によれば、*on* が用いられることにより、発話文に「軽蔑」のモダリティが生じていると説明している。また、(3)は *mon petit* と呼びかけられている対話者を *on* で指している例であるが、*on* で指すことによって「愛情」のモダリティが生じていると多くの先行研究で言及されている。

(2) Qu'est-ce qu'on me veut ?

(土井 1992 : 123)

(3) Alors, mon petit, on ne va pas à l'école aujourd'hui ?

(Blanche-Benveniste 2003 : 47)

また、以下に示すように主語を強調する際に、*on* は強勢形 *nous* と共起することが可能であるが、他の人称代名詞強勢形との共起は困難である²。

(1') nous on est exceptionnel.

(1'') (??moi / ??toi / ??lui / ??elle / ??vous / ??ils / ??elles) on est exceptionnel.

以上のことから、代名詞 *on* は人称代名詞のなかでもとりわけ 4 人称 *nous* との意味的に「親近性」があるということができよう。なぜ *on* と 4 人称 *nous* との間に親近性が認め

¹ オルレアン大学が公開する話し言葉コーパスより。話し言葉コーパスであるため、句読点は書かれていない。

² Muller(1970)によれば、主語を強調するために *on* が強勢形 *soi* と共起する場合もあるが、不自然であると述べられている。

? Que faire contre la simplicité de son acte quand *soi l'on* est à sa table de travail ? (Muller 1970 : 51)

られるのだろうか。また、上述のように口語において *on* は *nous* の代替語としてよく用いられ、かつ対等に用いることができるとされているが、口語であればいつでも *on* と *nous* は交替可能なのであろうか。

不定代名詞 *on* に関しては、これまでの多くの先行研究で人称代名詞と結びつけて考察されてきた。本論文においても人称論的観点から人称代名詞と比較考察を行う。まず第 1 節で、人称代名詞の性質を明らかにしつつ、人称論的観点から 4 人称代名詞 *nous* について考察する。続けて第 2 節で、*on* の意味的価値について詳細に検討していく。第 1 節と第 2 節で得られた結論をもとに、第 3 節で、前節までの *nous* と *on* についての考察を簡単に比較した上で、現代口語における *on* と *nous* の使用例を観察し、現代フランス語における *on* の機能について仮説をたてることにしたい。

1. 人称代名詞の性質

4 人称とはどのような人称なのかを明らかにするために、まず人称代名詞の性質を明らかにすることからはじめたい。議論が煩雑になるのを防ぐため、以下では人称代名詞の指示対象として人間のみを考察の対象にし、ものは含めないこととする³。

1.1. 「単数」の人称

そもそも発話行為は発話者と対話者の二者によって成り立っているものであるが、この発話の場における発話者が 1 人称であり、対話者が 2 人称である⁴。3 人称は、発話の場の外にいる人に言及する場合に用いられる人称であり、Benveniste のいう「非＝人称 (non-personne)」あるいは Damourette & Pichon のいう「不在の人称 (délocutif)」⁵がこれに該当する。

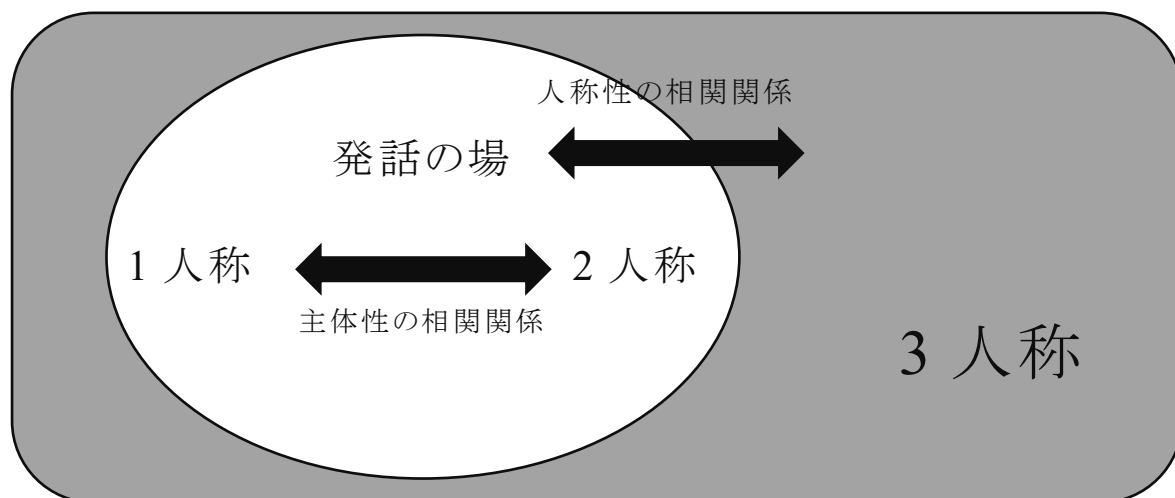
Benveniste (1966) の提唱する人称論では、この 3 つの人称に関して「人称性の相関関係 (corrélation de personnalité)」と「主体性の相関関係 (corrélation de subjectivité)」の 2 つの相関関係が認められ、動詞人称表現において恒常的にこの二つの相関関係が組織されているとする。Benveniste (1966) は、発話の場にいる 1 人称と 2 人称のみを「人称」と規定し、発話の場にはいない人称である 3 人称を「非＝人称」と呼んで人称から除外したが、この「人称」と「非＝人称」とを区別する関係が「人称性の相関関係」である。また、発話の場の中にいてかつ発話の主体（つまり発話者）である 1 人称と、発話の場の中にはいるが発話の主体ではない（つまり対話者である）2 人称とを分ける関係として規定されたのが「主体性の相関関係」である。この関係を簡単に図式化したものが、図 1 である。

³ もっとも 1 人称と 2 人称は、擬人化といったレトリックが介在しない限りは、人間しか指さないが、3 人称は人間のほかにものを指すことも可能である。

⁴ 実際の代名詞の使用において、本来は発話者を指すべき 1 人称代名詞が発話者を指していないといったいわゆる「人称の転換」とよぶべき現象が起こることがあるが、本論文では触れない。「人称の転換」に関しては、青木三郎(1989)、田口紀子(1992)、泉邦寿(2012)、フランス＝ドルヌ(2015)などの論考を参照されたい。

⁵ 字義通りには、「発話の場の不在である」ことを表す。

図 1



たとえば、以下の(4)における下線部で示した 1 人称代名詞 *je* は、ここでは発話者自身を指しているが、*je* は同時に「人称性の相対関係」によって発話の場の中にいる人であることを示し、「主体性の相対関係」によって発話者であることを示しているのである。

(4) EH5 : oui alors en fait j'ai fait des études de droit pendant assez longues et puis euh j'ai travaillé pendant une dizaine d'années (ESLO2_ENT_1005)

また、同様にたとえばある発話文の主語に *tu* が用いられれば、発話の場の中にいるただ一人の対話者であることを意味することになる。つまり、人称代名詞はその指示対象がある発話行為にどのように関わっているかを表すマーカーとして機能していると考えることができるのだ。

1.2. いわゆる「複数」の人称

いままで議論してきたのは「単数」の人称についてであった。今度はいわゆる「複数」の人称について簡単に素描することにした。本論においては、1 人称複数を 4 人称、2 人称複数を 5 人称、3 人称複数を 6 人称と呼称する。

1.2.1. 4 人称は「1 人称複数」の代名詞であるか？

Benveniste (1966)が論じているように、「わたしたち (*nous*)」は複数の「わたし (*je*)」の集合体ではない。実際に *nous* が表しているのは「わたし」と「非＝わたし (*non-je*)」との接合 (*jonction*)なのである。そのため、「何人かの生徒 (*des étudiants*)」というのが、「1 人の

生徒 (un(e) étudiant(e))」が複数集まってできた集合体であったり、6 人称 ils⁶が発話の場に不在である人(いわゆる 3 人称)が複数集まってできた集合体であるのとは異なるのである。そのため、nous を「1 人称複数 (la 1^{ère} personne du pluriel)」の代名詞であるということは、実際には不正確であるといえよう。4 人称代名詞の具体的な指示対象については、1.2.4.節で述べることにする。

1.2.2. 5 人称

5 人称 vous については若干複雑で、以下の 3 つの用法に分類できる。

(i) 5 人称 vous は、対話者が発話者と親しくない人物である場合、単数の対話者に対しても tu ではなく vous が用いられる。

(ii) 複数の対話者をまとめて指す場合である。しかしながら、この場合それぞれの対話者に対して 2 人称代名詞 tu を用いて、tu + tu + tu + ... = vous のように図式化することはできない。なぜならば、さきも述べたように 2 人称代名詞 tu は、ある発話行為の中で tu で指した相手を唯一の対話者であることを示すマーカーであるため、一回の発話行為の中に複数の tu がいることは矛盾するからである。このことから、複数の対話者を指す vous についても、対話者が複数いたとしても、2 人称 tu が複数集まってできた集合体であるわけではないため、「2 人称複数 (la 2^e personne du pluriel)」と呼称するのは不正確であるといえることができるだろう。

(iii) そして対話者と発話の場にいない人称(3 人称あるいは 6 人称)の接合である可能性が考えられる。ここには発話者は含まれない。

1.2.3. 6 人称

6 人称は、発話の場の外にいる存在である 3 人称が複数集まってできた集合体を表す人称である。3 人称代名詞は発話の場にいない無数の中の一人を指示する機能をもっているが、ある発話行為の中で 3 人称代名詞が複数出現し、かつそれぞれ指示対象が異なる場合も想定されうる。たとえば Marie が発話者で Pierre が対話者である発話行為の中では、発話行為には参与していない Luc も Catherine も 3 人称となる。また Luc と Catherine をまとめて指示する場合は 6 人称代名詞 ils が用いられる。つまり、5 人称が 2 人称が複数集まってできた集合体ではないのとは異なり、6 人称は 3 人称が複数集まってできた集合体である、というふうにみなせる。Benveniste (1966)が主張する通り、「非＝人称」である 3, 6 人称は唯一真の複数性が受容されている人称である。また、6 人称代名詞の指示対象には、発話者と対話者は含まれない。

1.2.4. 4 人称 nous の指示対象

⁶女性(名詞)のみの複数の集合体であることを表す elles もあるが、以下 6 人称について記述する際は、ils を代表させて記す。

4 人称 *nous* は「わたし」と「非＝わたし」とが接合してできた複合人称であることはここで確認したが、「非＝わたし」が具体的にどの人称を指すのかは、状況によって変化する。6 人称 *ils* については、発話の場の外にいる人(3 人称)の複数の集合体である。しかし、*nous* の指示値に関しては一例をあげると、*je + tu*、*je + vous(tu + il)*、*je + vous(tu + ils)*、*je + il*、*je + ils* が可能性として考えられ、*vous* や *ils* よりも潜在的な指示対象が広範であるといえる。

また、4 人称代名詞 *nous* の拡張用法として、発話者のみを指示する用法がある。たとえば、(5)に出てくる *nous* は王(*le roi*)のみを指している。

(5) C'est alors que le roi dit : « Nous sommes convaincu, messieurs, de son innocence. »
(Thomas 1956 : 280)

(5)のように、発話者のみを指すのに *nous* を用いると発話文に「謙遜」や「尊大」のニュアンスが付加される場合があり、この *nous* は「謙遜の *nous* (*nous de modestie*)」、「尊大の *nous* (*nous de majesté*)」とよばれている。このような発話者のみを指す *nous* については、本論の趣旨とは逸れるため、考察の対象にはせず、稿を改めて論じることにした。

以上 4 人称 *nous* についてまとめると、上述の「謙遜の *nous*」と「尊大の *nous*」を除いて、発話者単独を指すことはできないが、発話者以外を必ず指示対象に含めさえすれば *nous* で指示可能ということになる。つまり、*nous* が使用されるということはそれ自身で、発話者を含んだ複数の人間であることを表すのである。

2. 代名詞 *on*

2.1. 人間を指す代名詞 *on*

代名詞 *on* は、「人間」を意味するラテン語の普通名詞 *homo* が語源で、これが文法化され代名詞となったものであるとされている。そのことから、指示対象は人間に限られ、ものや動物を指すことはできない⁷。そのため、主語に *on* を用いるということは、すなわちそれだけで主語が人間であることを意味しているのである。換言すれば、*on* は照応や直示といった手続きをする前にすでに指示対象が人間であることを表しているのである。ところで Leeman (1991)は *on* の用法の一つに「非人称の *on* (*on impersonnel*)⁸」を挙げている。たとえば *il faut / on doit*、*il semble (cela ressemble) / on dirait* のような非人称の *il* や指示代名詞 *cela* (*ceci*)を用いた表現と交替が可能な場合、*on* は単なる文法的な支柱

⁷ 動物などが擬人化されて *on* で指示する場合もあるが、あくまで「擬人的」に用いられているのであって *on* が人間を指す代名詞であることには変わりはない。以下の文例は、オオカミが擬人化されて *on* で表されている。

Le cheval et la vache étaient égorgés et l'*on* avait mangé un peu dans l'un, un peu dans l'autre.
(Grevisse 2011 : 1010)

⁸ Creissels(2008)も「非人称の *on*(impersonal *on*)」を提唱しているが、こちらは 4 人称 *nous* の代替以外の用法における *on* を指しており、Leeman(1991)のそれとは異なる。

(support grammatical)としてしか機能しておらず、意味的価値はほぼ皆無であるというのがその論拠である。(6)の *on eût dit* はたしかに *cela ressemblait* と同意であるといえる。

(6) Il y a eu encore l'église et les villageois sur les trottoirs, (...), l'évanouissement de Pérez (on eût dit un pantin disloqué), (...) (*L'Etranger* : 30)

しかしながら、たとえ *on* の指示対象が具体的に同定することができなくても、動詞 *dire* の動作主が人間であることには変わりはない。そのため *on* に非人称用法があるという考え方には筆者は賛同できない。

2.2. *on* の持つ機能

不定代名詞 *on* の機能に関して、従来の先行研究では不定の人を示す機能と、人称代名詞の代用として用いられる機能の2つに分けて考えられてきた。さらに代名詞 *on* は、以下のように人間を総称的にも特定のにも指示できる。(7)における *on* は、「人間一般」の意味で人を総称的に指示しており、(8)では「誰か」の意味で発話者にとって(発話時点で)指示対象が同定できない人を特定のにも指示している。

(7) De toute façon, on est toujours un peu fautif. (*L'Etranger* : 33)

(8) Vers 3 heures, on a frappé à ma porte et Raymond est entré. (*Ibid.* : 59)

一方、人称代名詞が本来使われるべきところに、*on* が用いられる場合もある。話し言葉においては、*nous* にかわって *on* が用いられることが多いが、*nous* 以外の人称代名詞にかわって *on* が用いられる場合もある。(9)は、銀行の窓口でいつ小切手 (*le = le chèque*) が領収されるのかを尋ねた客に対して銀行員が発した発話である。この発話文には2回 *on* が使用されているが、指示対象はそれぞれ異なっており、1つ目の *on* が4人称 *nous* の代わりに用いられているのに対し、2つ目の *on* は小切手の処理センターの人たちをさしている。

(9) On le renvoie comme ça et puis on nous le renvoie comme ça.

(Blanche-Benveniste 2003 : 43)

ここに出てくる2つの *on* の指示対象がそれぞれ異なっていることによって、発話文の意味が曖昧になり、発話文の理解に困難をきたすということは想定しづらい。実際、Blanche-Benveniste (2003 : 43-44)は、この発話文を受けて銀行のこの顧客は、この2つの *on* がそれぞれ指すものを完全に理解したように思われると述べている。しかしながら、ここで疑問となるのは、同一の *on* という言語記号で示しておきながら指示対象が異なるのにも関わらず、なぜ問題なく発話文を解釈できるのか、また代名詞 *on* で指示するということにはどんな意味があるのか、という2点である。

発話文の解釈に関して、スペルベル&ウィルソンは重要なことを述べている。以下、その引用である。

[...] 聞き手が必ず正しい解釈、つまり話し手が意図した通りの解釈を復元するためには、発話解釈に用いられる文脈情報はすべて話し手と聞き手が知っているだけでなく、相互に知っている知識でなければならないということである。

(Sperber et Wilson 1995 : 邦訳 : 21)

つまり、(9)においては、発話者である銀行員にとっても、対話者である銀行の顧客にとっても、発話文の意味的内容を互いにすでに把握しているということを、発話者が確信しているからこそ、2つの異なる動作主をどちらも *on* で指示することが可能なのである。

だからといって、わざわざ *on* で指示することにどのような意味があるのだろうか。*On* がそれ自身で表すことは、主語が人間であることのみである。その *on* の性質から、この代名詞は動作主をわざわざ明示する必要のない場合に用いられることがある。(10)の例をみてみよう。

(10) L'avocat général a dit qu'à la suite des déclarations de Marie à l'instruction, il avait consulté les programmes de cette date. Il a ajouté que Marie elle-même dirait quel film on passait alors.
(*L'Etranger* : 142)

この *on* の指示対象は、「映画を上映した『人』」ということになるが、これはこの文脈において話題の主題では全くない。つまり、*on* は動作主を話題にしていないマーカーとして用いられることがあることを意味しており、換言すれば *on* は動作主を非焦点化する機能をもっているということができる。実際、人称代名詞などとは異なり、*on* は文の焦点にはなれず、*c'est...qui* 構文で *on* を主題化することも不可能であるという統語的制約がある⁹。

(11) On est égaux devant la loi.

→ **C'est on qui est / sont égaux devant la loi.*

文学作品においては、同定可能な指示対象に対しても、*on* が効果的に用いられることがある。これは動作主が人であることしかそれ自身では示さず、動作主を非焦点化することができる *on* の性質を利用したものであると考えられる。(12), (13)の例をみてみよう。

(12) Pendant les plaidoiries du procureur et de mon avocat, je peux dire qu'on a beaucoup parlé de moi et peut-être plus de moi que de mon crime. (*L'Etranger* : 125)

(13) Le régiment était composé de deux mille hommes ; cela lui composa quatre

⁹ もっとも *on* には、人称代名詞とは異なり対応する強勢形がないが、小田 (2016 : 10)によれば、意味的にも焦点化が不可能であるとしている。

mille coups de baguette, qui, depuis la nuque du cou jusqu'au cul, lui découvrirent les muscles et les nerfs. Comme on allait procéder à la troisième course, Candide, n'en pouvant plus, demanda en grâce qu'on voulût bien avoir la bonté de lui casser la tête ; il obtint cette faveur ; on lui bande les yeux, on le fait mettre à genoux.

(Candide : 32)

(12)は『異邦人』における主人公ムルソーの裁判における描写であるが、この on は検事とムルソーの弁護士を指している。『異邦人』は 2 部構成になっていて、第1部がムルソーが逮捕される前の描写で、第 2 部が逮捕されてからの描写であるが、第 2 部では刑務所の人、検察、裁判官のような人を指す on が散見される¹⁰。この on、ムルソーにとって近しくない人物であることや、ムルソーがこの人たちに対して関心がないことを表している。実際に、『異邦人』においてマリやレエモンなどムルソーと友人関係にある人物を on で指す例は確認できなかった。(13)はカンディードがブルガリア兵による刑を受けている場面で、この on が指すのはブルガリア兵である。人称代名詞で指示したり les Bulgares (ブルガリア兵) と名詞句で明示したりせず、on を主語に用いられ動作主が非焦点化されることで、読者は「ブルガリア兵が刑罰を『与える』」のではなく、「カンディードが刑罰を『受ける』」と解釈することになる。

以上、on の機能についてごく簡単にまとめると、on は人を指す代名詞であるが、人称代名詞とは異なり「人称性の相関関係」と「主体性の相関関係」を構築しない。On 自身は動作主が人であることを表すだけである。しかしながら、ここではまだ口語で nous の代替として用いられる場合の on については触れていない。4 人称 nous の代替用法の on については次節で論じることにする。

3. 口語における nous の代替の on

前節まででは、人称代名詞の性質を明らかにしつつ 4 人称代名詞 nous と不定代名詞 on がもつ固有の機能についてそれぞれ概観してきた。上で述べたように、人称代名詞が使用されると「人称性の相関関係」と「主体性の相関関係」が構築されるが、nous が指す指示対象は、他の人称代名詞と同じように、これらの相関関係だけでは同定不能で、最終的には発話状況や文脈に頼ることになる。一方、on は人称代名詞の使用で築かれる 2 つの相関関係は構築されず、それ自身では主語が人間であることしか示さないの、発話状況や文脈で指示対象を同定するしかない。

4 人称 nous は指示対象に必ず発話者が含まれ、かつ必ず発話者以外の人も含まなければならないという制約があるものの、Grafström (1969) が指摘する通り、人称代名詞の中では最も指示対象になりえる対象範囲が広範である。たとえば、4 人称 nous の指示対象が「発話者+発話者以外の全人間」であれば、on のもつ潜在的な指示対象と同じく

¹⁰ 逆に『異邦人』の第 1 部 (主人公ムルソーの逮捕前が描かれている) では、登場人物のセリフ部分 (間接話法を含む) における nous の代用以外は、このような指示対象が同定可能な on はみられなかった。

人間全体を指すことになる。5 人称 *vous* であれば、発話者が指示対象から排除されていることを意味するため、*nous* とは異なり、人間全体を指示することは難しい。*On* と *nous* の親近性はこの潜在的な指示対象の広範さに起因する。たとえば、(14)の文が *on* も *nous* も許容されるのはこの性質によるものであると思われる。

- (14) *On* est le 24 décembre.
Nous sommes le 24 décembre.
 ?? *Vous* êtes le 24 décembre.

On と *nous* のどちらを用いられうる場合として、科学論文における筆者を指す場合が挙げられる¹¹。(14)のように *nous* を用いても *on* を用いても文の意味に差異は生じないにしても、前節までで述べた通りこれらの代名詞の性質が異なるものであることには変わらない。しかしながら、口語において 4 人称を指す *on* については同様のことが言えるだろうか。

3.1. 現代口語における *on* と *nous*

オルレアン大学が公開している ESLO2 コーパスより話し言葉の録音を 3 つ採取し、4 人称を指す代名詞に関して分析を行った。各録音についてのデータは以下の通りである。

表 1

	ESLO2_REPAS_1247 (以下本文中でコーパス 1 と表記)	ESLO2_REPAS_1270 (以下本文中でコーパス 2 と表記)	ESLO2_ENT_1005 (以下本文中でコーパス 3 と表記)
録音年	2012	2012	2010
スタイル	食事の会話	食事の会話	インタビュー
話者	姉弟 (2 人とも 1960 年代生まれ)	母 (45-55 歳) 3 人の子供 (12-17 歳)	対談のオーガナイザー (生年不明) 被験者女性 (1960 年代生まれ)
録音時間	約 1 時間	約 30 分	約 1 時間
レジスター	インフォーマル	インフォーマル	フォーマル

この 3 つの録音において、4 人称を指す *on* (以下の表とグラフでは単に *on* と表記) と *nous*¹²の生起数¹³を調査した結果、インフォーマルな会話であるコーパス1とコーパス2に

¹¹ 論文中の筆者を指す場合に、いつでも *on* と *nous* が互いに交替可能なわけではなく、*nous* でないと許容されない文脈などがあるが、本論文では詳細には触れない。稿を改めて議論することにした。

¹² 主語人称代名詞の *nous* に限る。目的補語の *nous* は考察の対象ではない。

¹³ 同じ語が繰り返されているものについては、1 例とカウントした。つまり、(i)において、*on* の生起数は 1 として数えている。

おいては **nous** が 1 例も検出されなかった。フォーマルな会話であるコーパス3においては主語に **nous** が用いられる例はあったものの、26 例のみでそれは全体のわずか 8.7%である。

表 2

	コーパス1	コーパス2	コーパス3
on	51 (100%)	81 (100%)	273 (91.3%)
nous	0 (0%)	0 (0%)	26 (8.7%)

表 2 の数値をみると、ほとんど躊躇することなく話し言葉で **nous** のかわりに **on** が用いられていることが確認できるが、かつてはこの **on** の用法に少なからず抵抗をもつ者もいたようだ。Grafström (1969)では、**nous** のかわりに **on** を使う子に対し、きちんと **nous** を使うよう親がたしなめている例をあげている。

(15) Suit un exemple entendu le 27 janvier 1939. Un garçon de 17 ans : *En classe, on était vingt-huit.* – Sa mère : *On était ! Nous étions vingt-huit.* Je ne crois guère qu’une mère de nos jours eût réagi de cette façon. (Grafström 1969 : 274)

また、Thomas による *Dictionnaire des difficultés de la langue française* (1956)によれば、**nous** の代替の **on** はくだけた話し言葉で多用されるが、**on** よりも **nous** を用いるべきであると記されている。

(16) **On** est fréquemment employé pour **nous** dans le langage familier ou populaire. [...] *Après la cérémonie, on a été boire un verre.* [...] *On dira toujours mieux : Après la cérémonie, nous avons été boire un verre...* (Thomas 1956 : 278)

しかしながら表 2 で示した数値だけをみると現代口語においては、フォーマルな会話であっても 4 人称を指すのに **on** がかなり頻繁に用いられることもあるようである。Grafström (1969)は、現代口語において **on** が **nous** の代替で頻繁に用いられるのは、4 人称 **nous** の潜在的な指示対象の範囲が広範であるからではないかと指摘している。同時に、もともとは 4 人称以外の人称代名詞と同様に **nous** の代替として **on** を用いることで、文体的効果を帯びていたのであるが、その文体的価値は失われていき、もともと口語や俗語で用いられていたものが次第に定着したのではないかと述べている。

以下、コーパスから採取した **on** と **nous** の文例をみながら、さらに考察を試みよう。以下の(17)は、4 人称 **nous** を指すのに **on** が用いられている例である。

(17) ch_OB1 : et alors pour quelles raisons vous êtes arrivés euh ?

(i) on on est quand même tout près pour aller faire des balades en vélo à pied
(ESLO2_ENT_1005)

EH5 : professionnelles mom mari a été muté dans la région on venait de Paris et voilà il a été muté euh à Orléans c'est un choix on avait demandé à partir en région (ESLO2_ENT_1005)

それに対し、nous を主語に用いた例は 26 例しか採取されなかった。以下が主語に nous が用いられている例である。

(18) ch_OB1 : depuis quand vous habitez euh à Orléans ou dans l'agglomération ici à Olivet ?

EH5 : alors nous sommes arrivés à Orléans en août quatre-vingt-treize et à Olivet en mai quatre-vingt-quatorze voilà (ESLO2_ENT_1005)

主語に nous が用いられている例を調べると、これに続く活用動詞¹⁴は être が 9 例、avoir が 11 例、aller が 2 例、その他動詞(すべて第1群規則動詞)が 4 例であった。Landragin&Tanguy (2003)が述べるように、on に続く動詞は必ず 3 人称形となるので、4 人称形に比べてより動詞の活用が単純でより短くなるだけでなく、代名動詞が用いられたときに、nous 形の繰り返しを避けられるメリットが on にはある。これは口語において nous のかわりに on が好んで用いられる一因となっているように思われる。実際、この対談でも nous が使われていたのは、頻繁に用いられる être や avoir, aller と活用が比較的容易な規則動詞を動詞にとった場合のみであった。また on を主語にたてた代名動詞が含まれる文例(cf. (19))は 14 例確認できたが、nous を主語にたてた代名動詞を用いた例は本調査では確認できなかった。

(19) et puis on se voit dans leurs petites soirées (ESLO2_ENT_1005)

このように、後ろにとる活用動詞が on か nous かどちらを用いるかの一つの基準になっている可能性がある。

また、nous on と 2 つの代名詞が並置されている例も数例確認でき、この場合の on は nous の言い換えであるとも考えられる(cf. (20))。

(20) des chefs de groupes ont dit euh bah nous on doit arrêter qui a envie de prendre notre suite (...) (ESLO2_ENT_1005)

しかしながら、on と nous が併用されると、どちらも発話者を含む複数の人間であることは変わらないものの、on と nous の機能の違いが現れているように思われる例も存在する。以下の(21)をみてみよう。

¹⁴ 複合時制の助動詞 être、avoir もこれに含む。

(21) EH5 : et puis euh nous participons à la messe qu'on appelle la messe de la chevauchée de Jeanne d'Arc (ESLO2_ENT_1005)

(21)の nous の指示対象は発話者を含む家族で限定的であるのに対し、on はより広範囲である。しかも、(21)は on を用いずに以下のようにパラフレーズしたとしても、文の意味に大差は認められない。

(21') et puis euh nous participons à la messe qui s'appelle la messe de la chevauchée de Jeanne d'Arc

つまり、(21)における on は発話者を含む複数の人間を指しているとも考えられるが、その指示対象は on によって非焦点化されているといえることができる。また、(21)の nous participons は on participe といっても差し支えないが、フランス語ネイティブのインフォーマントによれば on を用いる場合はやはりくだけた印象にはなるとのことである。

(22)のように、on と nous が併用されている例は本論文で扱ったコーパスでは 1 例のみであったが、同様の例は Blanche-Benveniste (1985)でも挙げられている。(22)はある地域の有力者が発話したものであるが、on はこの有力者の住む地域の人々を指すのに対し、nous はより限定的に有力者が属する団体を指している。ただし、以下の例では(21')のように無生物を主語にたて、on を消去することはできないように思われる。

(22) parce que c'est ce qui va nous permettre dans les années à venir d'apporter des changements dont on a bien besoin je dis « dont on » parce que moi aussi j'y habite dont on a bien besoin je crois que c'est avec la collaboration des comités que nous arriverons dans les années à venir à pailler ce retard que nous avons je le reconnais (Blanche-Benveniste 1985 : 208)

以上のデータ分析を簡単に総括すると、発話者を含む複数の人間を指すのに、不定代名詞 on はたしかに nous の代替としてよく用いられていた。またこの場合、nous と on は相互に代替可能であるため、この場合の on は 1 節で述べたような nous 固有の機能は備えられていると考えることができる。逆に nous はインフォーマルな会話のコーパスでは生起数ゼロで、フォーマルな会話においてもあまり用いられていないことから、逆に nous が高いレジスターであることを示すマーカーとしても機能している可能性は高い。

また、(21), (22)のように主語に on と nous が併用されている場合、on の方が nous よりも指示対象がより広範である傾向があることを示唆したが、on も nous もどちらも「発話者を含む複数の人間」を指している点では等しいため、人称論的観点からはこれ以上分析不可能であるように思われる。On と nous について、人称システムだけでなくそれぞれの代名詞の指示機能を考察しなければならないだろう。

4. おわりに

人称代名詞はそれが使用されると自動的に「人称性の相関関係」と「主体性の相関関係」が構築され、4 人称代名詞 *nous* は発話者を含む複数の人間の集合体を指す代名詞として機能しているのに対し、不定代名詞 *on* はそれ自身では単に主語が人間であることを表すだけで、動作主を非焦点化する機能をもっている。このことから不定代名詞 *on* は 4 人称代名詞 *nous* と根本的に異なる代名詞であるということができる。しかしながら、4 人称 *nous* は、発話者が含まれている複数の人間であれば *nous* で指示できることから、人称代名詞の中でも最も潜在的な指示対象が広範であり、これが人間であれば誰でも指示対象になりうる *on* との親近性の正体である。

その親近性により、口語では *on* と *nous* のどちらを主語に用いても許容される場合がある。この場合の *on* は *nous* がもつ固有の機能を持っていて、主語代名詞に続く動詞活用を容易にするために用いられている可能性がある。また、本論文におけるコーパス分析の結果、4 人称を指すのに *nous* よりも圧倒的に *on* が用いられており、主語の *nous* 形は高いレジスターの会話でしかここでは観察されなかった。つまり、*on* は 4 人称を指す場合のくだけたマーカーであるというよりは、主語の *nous* が高いレジスターであることを表すマーカーであるという方がより正確であるといえるのではないだろうか。また、主語に *on* と *nous* が併用されると、それぞれの指示対象が異なる場合があり、*on* の方が *nous* よりも指示対象が広範である傾向があることを示唆した。しかし、人称論的な分析では、指示対象の広範さまでは言及するに至らない。よって、それぞれの代名詞の指示機能について、精密に分析する必要性があるだろう。これについては今後の課題としたい。

参考文献

欧文

- ASHBY, WILLIAM J. (1992). « The variable use of ‘on’ versus ‘tu’/‘vous’ for indefinite reference in spoken French », dans *Journal of French Language Studies* 2, pp. 135-157.
- BENVENISTE, E. (1966). *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard.
- BLANCHE-BENVENISTE, C. (1985). « Coexistence de deux usages de la syntaxe du français parlé », dans : *Actes du XVII^e Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes (Aix-en-Provence, 29 août-3 septembre 1983)*, vol.7, Université de Provence, pp. 203-214.
- (2003). Le double jeu du pronom ‘on’, dans : HADERMANN P., VAN SLIJCKE A. ET BERRE M. (eds), *La syntaxe raisonnée. Mélanges de linguistique générale offerts à Annie Boone à l’occasion de son 60^e anniversaire*, Louvain-la-Neuve : De Boeck Duculot, pp. 43-56.
- CHAREAUDEAU, P. (1992). *Grammaire du sens et de l’expression*, Hachette.
- CREISSELS, D. (2011). « Impersonal Pronouns and Coreference : two Case Studies », *Workshop on Impersonal Pronouns*, téléchargeable sur <http://www.umd7023.cnrs.fr>.
- DAMOURETTE, J. ET PICHON, E. (1940). *Des mots à la pensée*, vol 6, d’Arthey.
- FLØTTUM, K. et al. (2007). *ON Pronom à facettes*, De Boeck et Larquier.
- GRAFSTRÖM, A. (1969). « ‘On’ remplaçant ‘nous’ en français », dans *Revue de linguistique romane* 33, pp. 270-298.
- GREVISSE, M. (2011). *Le Bon usage*, 15^e édition par ANDRE GOOSSE, Bruxelles : De Boeck-Duculot.
- LANDRAGIN, F. ET TANGUY, N. (2014). « Référence et coréférence du pronom indéfini ‘on’ », dans *Langages* 195, pp. 99-115.

- LEEMAN, D. (1991). « *On thème* », dans *Linguisticae Investigationes* XV, pp. 101-113.
- MULLER, C. (1970). « Sur les emplois personnels de l'indéfini 'on' », dans *Revue de linguistique romane* 34, pp. 48-55.
- SPERBER, D. ET WILSON, D. (1995). *Relevance : communication and cognition*, 2nd ed., Cambridge : Blackwell (邦訳 : D. スペルベル、D. ウィルソン 内田聖二ほか訳、1999、『関連性理論－伝達と認知－』、研究社).
- THOMAS, ADOLPHE V. (1956). *Dictionnaire des difficultés de la langue française*, Larousse.
- VIOLLET, C. (1988). « Mais qui est 'on' ? Etude linguistique des valeurs de 'on' dans un corpus oral », dans *Linx* 18, pp. 67-75.

和文

- 青木三郎. 1989. 「人称に関する日・仏語対照言語学的研究」. 『文芸言語研究 言語篇』16, 筑波大学, pp. 1-44.
- 泉邦寿. 2012. 「一人称のトリック的用法について」. 喜田浩平編, 『川口順二教授退任記念論集』, pp. 61-67.
- 小田涼. 2016. 「不定代名詞 *on* による行為主体の希薄化について」. 東郷雄二, 春木仁孝編, 『フランス語学の最前線 4』, ひつじ書房, pp. 1-45.
- 川口順二. 2017. 「文法的とは何か? フランス語不定代名詞 *on* をめぐって」. 『フランス語学研究』51, 日本フランス語学会, pp. 125-131.
- 田口紀子. 1992. 「フランス語人称代名詞の転用」. 『仏文研究』21, 京都大学フランス語学フランス文学研究会, pp. 1-10.
- 土井隆広. 1992. 「“on”を用いた情意表現について」. 『人文論究』, 第41輯, 関西学院大学, pp. 118-128.
- フランス＝ドルヌ. 2015. 「偽装された命令 *Je monte, je valide*」. 川口順二編, 『フランス語学の最前線3』, ひつじ書房, pp. 251-274.

例文出典

- CAMUS, A. (1944). *L'Etranger*, folio, Gallimard.
- VOLTAIRE (1759). *Candide ou l'Optimiste*, folio classique, Gallimard.